
刹那 in IS世界

グラ公

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那 in IS世界

【Nコード】

N4063T

【作者名】

グラ公

【あらすじ】

国連軍との最終決戦において、グラハムと相打ちになったガンダ……もとい、刹那・F・セイエイ。彼が次に目を覚ました場所は、IS学園の医務室だった。……趣味で書く様な薄っぺらい小説ですので、駄文等はご了承ください。

プロローグ（前書き）

あらすじにも書いてありましたが、趣味で書く小説故、誤字脱字・間違い等あると思います。

それでも大丈夫という方は、どうぞごゆっくり見ていって下さい。

感想等も書いていただけると筆者が喜びます。
随時募集中ですので、お気軽にお書き下さい。

プロローグ

「貴様は歪んでいる！」

エクシアのGNソードがフラッグの頭部を薙ぐ。

「そうしたのは君だ！」

「っぐ！」

フラッグの拳がエクシアのコクピット付近を捉える。

「ガンダムという存在だッ!!！」

「っああッ!!！」

フラッグの蹴りが決まり、エクシアは体勢を崩される。しかしそれでも、右腕のGNビームライフルを連射する。メインカメラが無い状態で肉薄の射撃だが、フラッグはそれを全てかわしきる。無論フラッグも先程の反撃で頭部を失い、尚且つ片足も失っていた。

「だから私は君を倒す！ 世界などどうでもいい…己の意思で！」

「貴様とて、世界の一部だろうに！」

「ならばそれは、世界の声だ！」

両者の一歩も引かない争い。それが、フラッグを駆る青年と、エクシアを駆る少年を表していた。

「違う！ 貴様は自分のエゴを押し通しているだけだ！」

少年の叫びが響く。

「貴様のその歪み…この俺が断ち切るッ！！」

「よく言った！ ガンダムウウウッ！！」

GNソードを構える。

GNビームサーベルを構える。

最早避けるなどという考えは持っていなかった。ただ己の剣を真っ直ぐに構え、虚空を突き進む。

歪みを断ち切るために。

仲間の仇を討つために。

「はあああああッ！……！！」

「うおおおおおッ！……！！」

そして。

その剣は逸れる事無く、両者を貫いた。

「ハワード、ダリル……仇は……」

「ガ、ガンダム……」

爆散する機体。虚空に広がる光。しかしそれは、あまりにも無慈悲な光だった。

西暦2307年。

私設武装組織〈ソレスタルビーイング〉対国連軍との最終決戦において、ガンダムマイスター「刹那・F・セイエイ」と、ユニオンのトップガン「グラハム・エーカー」は、戦闘中行方不明（M・I・A）となった。

プロローグ（後書き）

あるはずのものが無く、無いはずのものが存在する。目覚めた場所
は違う世界。自ら破壊者と名乗る少年は、それをどう受け入れるの
か？

次回【天使飛来】

新たな世界を前に、少年の新たな戦いが始まる。

主人公&機体設定（前書き）

主人公&機体設定です。

主人公&機体設定

○刹那・F・セイエイ

年齢…16歳

出身…中東（クルジス共和国）

国籍…日本

IS適性…AA

専用機…エクシア

主人公の少年。私設武装組織へソレスタルビーイングのガンダムマイスターだったが、国連軍との最終決戦においてグラハム・エーカーと相打ち、気が付けばIS学園にいた。

背が低く幼い顔立ちをしているが、性格は寡黙で協調性が無い。しかし、時折優しさや激情を見せる事もある。IS操縦技術は非常に高く、接近戦を得意とする。反面、精密射撃は苦手。

設定としては1stシーズンの刹那です。

コメディも入れて行こうと思うので、天然ボケキャラの路線が決まりつつあります。

●エクシア

◆武装

・GNソード

・GNビームサーベル×2

- ・GNビームダガー×2
- ・GNロングブレード
- ・GNショートブレード
- ・GNビームライフル
- ・GNバルカン×2
- ・GNシールド

刹那の乗っていたガンダムへエクシアが、ISに変化した機体。待機状態は、CBのマークの装飾が施された銀色の指輪。接近戦に特化した機体で、第三世代型に匹敵する高い性能を有する。五種七本の刀剣型武器を使用して戦う『セブンソード』も健在。

初期起動時には四肢と胴体の一部に装甲を展開する。また、GNDライヴによる粒子の半永久供給が可能だが、模擬戦などではリミッターを付ける。

主人公&機体設定（後書き）

後々は他のキャラのも書いていこうと思います。

…時間があれば。

第1話 #天使飛来（前書き）

これはあらかじめ書き溜めしていたものですが、本来筆者は更新速度が非常に遅いという欠点を持っております。

ですので基本不定期更新となりますが、できたものはすぐに上げていきますのでよろしくお願いします。

では、ごゆっくりどうぞ。

第1話 #天使飛来

刹那「…」

刹那「ここ、は…？」

視界に映るのは一面の白。刹那は痛みに顔を歪めながら、ゆっくりと上半身を起こした。

何処かの部屋。白いベッドの上。患者が着る様な白い服。変わり果てた環境に、刹那は焦らずにはいられなかった。

刹那「何故俺は…！」

？「…目が覚めたか」

刹那「ッ——何者だ！？」

刹那が視線を向けた先には、一人の女性が立っていた。腰まで伸びた黒髪を後ろで束ね、服装は全体的に黒ばかり。鋭くも澄み渡った瞳は、目があった刹那を畏縮させる。

？「まったく…扱いづらそうな奴だ」

刹那「くっ…！」

？「ああ、言っておくが武器は無いぞ」

悠々と言う彼女に、刹那は諦めた様にため息をついた。

刹那「…何が望みだ」

？「まず名を教えろ、馬鹿者」

刹那「…刹那・F・セイエイ」

？「セイエイ、か」

その女性はパイプ椅子に座り、悠然と言った。

千冬「私は織斑、織斑千冬だ。…どうやら、訳ありらしいな」

・
・
・
・
・
・

刹那「そう、なのか…」

千冬の説明を聞き終えた刹那の声に、覇気は宿っていなかった。

千冬「ISを知らないとはな…本当に訳ありだったらしいが、深くは聞かんよ」

刹那「…感謝する」

刹那は顔を上げ、千冬に礼を言った。

千冬「さて、と。セイエイ、体は動くか？」

刹那「ああ」

千冬「そうか。だったら…少し用がある。ついてこい」

刹那「分かった」

含みのある笑みを見せる千冬に、刹那は小さく頷いた。

・
・
・
・
・
・

刹那「ここは…？」

千冬「第三アリーナ。IS 同士の試合などが行われる場所だ」

広いアリーナの真ん中に二人は立っていた。殺風景なこの場所に、介入してくる者はいない。

刹那「それで…俺は、何のために呼ばれた？」

千冬「…そうだな、単刀直入だ。これを受け取れ」

刹那「っ…これは…？」

千冬が放った何かをキャッチした刹那。銀色に輝いているそれは、ソレスタルビーイングのシンボルマークの装飾が施された指輪だった。

千冬「倒れているお前の傍に落ちていた物だ」

刹那「だが…俺はこんな物を持っていた覚えは——ぐあああっ！？」

千冬「人の話を最後まで聞け、この馬鹿者」

刹那に鉄拳制裁を加えた後、千冬は静かに言う。

千冬「勝手に調べさせてもらった結果だが…その指輪が、ISの『待機状態』である事が分かった」

刹那「これが、ISに…?」

千冬「理論上はそうなる。…セイエイ、填めてみる」

刹那「…ああ」

一つ呼吸を置いた後、刹那はどの指に填めるべきかを迷った。

千冬「何を迷っているんだか…まったく。どうせなら左手の薬指に
してやれ」

刹那「…」

そしてそれを填めた瞬間、目映い光が辺りを襲う。

刹那「これ、は…!?!」

千冬「…まさか、こうまで予想が当たってしまうとはな…」

光が収まったそこには、白と青の装甲に四肢と胴体の一部を包んだ刹那の姿があった。

・ ・ ・ ・ ・

刹那「これが、IS…だが、この装甲は…」

千冬「ん？　　どうかしたか？」

刹那「…いや、何でもない」

千冬「そうか…まあ、それがお前も今言っていた通りISだ」

千冬の言葉を聞きながら、刹那はISの情報を処理していた。

右腕に装備された実体剣、その下部に内蔵されたライフル、両腰の長短一対の実体剣、そして四本の“非”実体剣。

それらの武装はまさしく、彼が乗っていた機体と同じ物だった。

刹那（このIS、やはり…）

千冬「満足に動けるか？　　セイエイ」

刹那「…ああ。機体のデータも把握した」

千冬「ならいい。今からお前に、IS学園の試験官…まあ、教師だ。それと戦ってもらう」

刹那「…分かった」

軽く機体を動かしながらも、刹那は情報の整理を行う。
千冬はふと気が付いた様に、熱中している刹那に尋ねた。

千冬「そういえばその機体…名はあるのか？」

刹那「…何故だ？」

千冬「いや…何故かブラックボックス化されていたものだから、名は分からなかった」

刹那「…ガンダムだ…」

千冬「何？」

聞き直してくる千冬に、刹那は静かに答えた。

刹那「…へエクシア」。それが、この機体の名だ」

千冬「エクシア、か…いい名じゃないか」

刹那「…ありがとう」

千冬「ふっ…やっと笑ったか」

刹那「何…？」

千冬「仏頂面しか出来ないわけじゃないだろう？　もっと笑ってみろ、世界が広がるぞ」

刹那「…」

そっぽを向く刹那に苦笑しながらも、千冬は話を切り替えた。

千冬「…話が逸れたな。それで、相手だが…山田先生」

真耶「は、はいっ！」

刹那が振り向くと、そこにはISを装着した女性が立っていた。肩下まで伸びた緑髪に、サイズが合っていないのか少しずれている黒眼鏡。身長は見た目小さく、顔付きも幼さが残っている。

千冬「紹介しよう。私と同じIS学園教師の山田先生だ」

真耶「は、初めまして…山田真耶です。えっと…」

刹那「刹那・F・セイエイだ」

真耶「そ、そうですか。セイエイ君、よ、よろしくお願いします」

刹那「ああ、よろしく頼む」

千冬「自己紹介は済んだな？」

端で見守っていた千冬が、二人に声を掛ける。

千冬「それじゃ…山田先生、お願いします」

真耶「あっ、はい」

千冬「セイエイ、山田先生は強いぞ…全力で行け」

刹那「了解」

そして千冬が離れ、刹那と真耶が向き合う。刹那のISへエクシア
✓と、真耶のIS〈打鉄〉が互いを捉える。

刹那「エクシア、刹那・F・セイエイ…目標を駆逐する！」

真耶「い、行きますッ!!」

次の瞬間には、鏗り合いの金属音がアリーナに響き渡った。

第1話 #天使飛来（後書き）

世界は変わっていた。世界は歪んでいた。男は成す術無く倒れ、女は優雅にそれを踏みにじる。求めた平和は、形を変えていた。

次回【邂逅】

刹那、運命の人と出会う。

第2話 #邂逅（前書き）

溜め分です（・ω・）

第2話 #邂逅

刹那「…」

刹那「…はあ」

刹那は自室——IS学園の寮の自室である——のベッドの上に座りながら、珍しく大きなため息をついていた。
彼の目の前には一着の制服。IS学園の制服である。

刹那「何故、こうなった…」

——先日。

真耶とのISによる模擬戦は、千冬すら開いた口が塞がらない結果となった。

接近した打鉄の刀をGNソードの一撃で切り裂き、瞬間的に左手はビームサーベルを抜き放つ。横薙ぎの一閃とそこからの追撃は、打鉄のシールドエネルギーを尽きさせるには十分な威力だった。

当然、模擬戦はそこで終了。元代表候補生の真耶を、刹那が一方的に下したのだ。

そして、千冬が今朝に部屋に来て刹那にこう言った。

千冬『お前には特例措置として、IS学園に編入してもらう事になった。部屋はここをそのまま使え、制服はサイズを合わせておいた。クラスは私と山田先生が担任の一年一組だ、忘れるなよ』

刹那『…すまないがもう一度——』『まあ、頑張れよ』…』

——そして、現在に至る。

刹那「学生…歳で言えば、妥当なものか」

刹那は丁寧に折り畳まれた制服を見ながら、再び小さくため息をつく。そして、ゆっくりとベッドから立ち上がる。

刹那「…外にも出るか」

彼にしては珍しい、目的無しの外出だった。

・
・
・
・
・

・
学園の近くにある公園。

刹那はそのベンチに、Tシャツとジーパン姿で座っていた。ちなみにこれは千冬が『パイロットスーツと制服だけでは外出すら出来まい』と、彼女の自費で刹那に購入したものだ。

刹那「…」

刹那「…暇だな」

露店で買ったホットドッグを食べながら、刹那は小さく呟いた。そんな折、彼の視界にあるものが飛び込んでくる。

刹那「あれは…」

腰上まで伸びた金髪を束ねた美少年？が、公園の隅で見るからに柄の悪そうな男達に絡まれている。刹那はベンチから立ち上がり、その方向へと歩いた。

「なあ兄ちゃん。ちょっとだけ金貸してくれよー？」

「やつ、やめてください！」

「まあまあ、言う事聞いといった方が「待て」…なんだあ？」

男が振り向いたそこには、刹那が立っていた。

刹那「その辺りでやめておけ」

「ああ？ 正義の味方気取りか？ …かっこつけてんじゃねえよっ
！！」

男の放った右ストレートは、先程まで刹那の顔面があつた宙を捉える。

次の瞬間には、男の腹部に強烈な一撃が見舞われていた。

「なっ…！？」

狼狽える男の仲間を前に、刹那は小さく呟いた。

刹那「ガンダムだ…」

刹那「…俺がガンダムだ」

・
・
・
・
・
・

「ぐ、ううつ…」

「ぐはっ」

地面に倒れ伏す男達を見ながら、刹那は静かに息を整える。その表情は余裕綽々で、傷はどこにも見当たらない。呆然としている金髪の少年に、刹那は表情を変えないまま問う。

刹那「大丈夫か？」

「あ…う、うん。助けてくれて、ありがとう」

「僕の名前はシャルル、シャルル・デュノアだよ」

刹那（下手にコードネームを教える必要は無い、か…）

刹那「…カマル・マジリフ」

シャルル「そっか。改めてありがとう、カマル君」

刹那「礼はいい」

そう言い、シャルルの手を強引に引く。鋭い視線の先には、こっちに向かって走ってくる警察官の姿があった。

刹那「離脱するぞ！」

シャルル「ちょ、ええっ!？」

・ ・ ・ ・ ・

刹那「はっ、はあっ…」

シャルル「っ、はーっ…」

数分後、二人はさっきの場所から遠く離れた小さな公園にいた。さすがに走り続けて体力がもつはずもなく、膝に手について息を荒げる。

シャルル「っ…ははは…」

刹那「…?」

突然笑い出したシャルルに、刹那は訝しげな表情を浮かべる。

シャルル「思ったより、強引な性格なんだね」

刹那「…あの場で捕まれば厄介な事になる。顔も特定されていないなら、逃げる事が一番だろう」

シャルル「確かに、言われてみるとそうかも」

刹那「…巻き込んですまない」

シャルル「全然平気だよ。寧ろ、先に助けてくれたのはカマル君だから」

シャルルの明るい笑顔に、刹那も小さく笑う。

シャルル「そういえば…カマル君は、この近くに住んでるの？」

刹那「ああ」

シャルル「じゃあ、IS学園の事も知ってるよね？」

刹那「…そうだな。表向いた事だけだか」

刹那は口外しなかった。シャルルは気にせず、話題を変えて色々な話をする。

千冬から聞いていた。女性しか動かせないはずのISを動かした“一人目”の“男”、「織斑一夏」。たちまち世界中にその事実は広まり、最早一夏を知らない人間はいない程だ。

しかし刹那もまた、非公式でありながらISを動かした男。まだ発表もされていないため良かったが、千冬には『口外するな』と釘を打たれていたのである。

刹那（知れば情報は瞬く間に広がるだろう…）

シャルル「ねえ、カマル君」

刹那「…何だ」

急に静かな口調になったシャルルに、刹那は視線を向ける。

シャルル「ISを…この世界を、どう思う？」

その瞳には、複雑な感情が織り混ざっていた。

刹那「…女尊男卑となった、この世界か」

シャルル「…うん」

刹那「…俺には、分らない」

シャルル「そっ、か…」

刹那「…だが、俺はまだ戦っている」

シャルル「え？」

刹那「…戦って、いるんだ」

突然の言葉に、シャルルは刹那を見る。

その瞳は、どこか遠くを見ている様だった。

シャルル「どういう事…？」

刹那「…知らなくていい。俺自身の問題だ」

シャルル「ま、待って！ カマル君！」

その場を去ろうとする刹那を、シャルルは呼び止めようとする。

シャルル「まだ、もう少しだけ話を…！」

刹那「…俺の名は、カマル・マジリフではない」

言葉の意味が分からず、呆然とするシャルル。

刹那は彼女に向き直り、最後にこう告げた。

刹那「…コードネームは刹那・F・セイエイ。ソレスタルビーイング…いや、IS学園のガンダムマイスターだ」

言い切って、再び背を向ける。その背中が徐々に遠くなっていくのを見ながら、シャルルは小さく呟いた。

シャルル「ガン、ダム……？」

第2話 #邂逅（後書き）

私設武装組織の構成員という肩書きの彼は、今この場には存在しない。クラスメイトは異例を除けば全員女子。そして、異例の肩書きを貼られた彼らは――…

次回【クラスメイトは二人を除き全員女子・前編】
刹那、学生になる。

第3話 #クラスメイトは二人を除き全員女子（前書き）

溜め分その3。

ただし明日から修学旅行なので三日程更新できず。

ご了承ください。

第3話 #クラスメイトは二人を除き全員女子

一夏「織斑一夏です。よ、よろしくお願いします」

一夏の声が、教室中に響き渡る。刹那は学園の制服姿で、一夏の背中を見ていた。

一夏「：以上です」

空気を読めないどころか感じさえ出来ない一夏に、クラスメイト全員が大きなため息をつく。

真耶「じゃあ、次の人は：」

副担任となった真耶から視線を外し、窓の外に目を向ける刹那だった。

・ ・ ・ ・ ・
真耶「えーっと、次は：せ、セイエイ君かな？」

真耶の言葉に、女子生徒全員：簡単に言えば、一夏と刹那を除く40名近いクラスメイトが視線を向ける。

若干警戒しながらも、刹那は静かに席を立った。

刹那（自己紹介、か：どうする：？）

刹那『ガンダムだ：』

真耶『えっ？』

刹那『：俺がガンダムだ』

刹那（あり：いや、そんな事をすれば後々：）

刹那『チヨリーツ☆』

刹那（だあってろ！！）

ロックオン『これは無いわ』

アレルヤ『意外だよ…』

ティエリア『なんならそのまま帰ってこなくていい』

刹那（勘違いされているッ！？ 俺はそんなつもりは…！）

真耶「え、えーつと…セイエイ君？」

刹那「…すまない。考え事をしていた」

申し訳無さそうな表情で尋ねてくる真耶に淡々とした口調で答え、
ゆっくりと口を開く。

刹那「…刹那・F・セイエイだ、よろしく頼む」

沈黙。

周囲からは期待がプレッシャーとなって押し掛かる。

刹那「…以上だ」

そして一夏に劣らぬの空気の読めなさを、クラスに知らしめたのだ
った。

・ ・ ・ ・ ・
一夏「よっ」

刹那「織斑一夏か」

一夏「おう。えっと…刹那・H・ヘイセイだっけか？」

刹那「…それは年号だ」

一夏「えっ？ あっ、ああ。冗談だぜ、冗談」

刹那「…刹那・F・セイエイ」

一夏「分かってるよ。お互いよろしくな、刹那」

刹那「ああ、よろしく」

話し掛けてきた一夏と握手し、互いに視線を交わす。その光景に目を輝かせていた女子生徒は、所謂腐女子というやつだ。

一夏「そういや、刹那って専用機持ちなのか？」

刹那「ああ…一応な」

一夏「すげえな。どんなタイプなんだ？」

刹那「一般的なISとは大分違うが…近接戦闘型なのは確かだ」

そんな他愛も無い会話をしている時だ。

「ちょっとよろしくて？」

一夏「へ？」

「聞いてます？ お返事は？」

一夏「あ、ああ。聞いてるけど…どういう用件だ？」

刹那は一切反応せず一夏が受け答えるが、相手の女子はわざとらしく声を上げる。

「まあ！ なんですよ、そのお返事は。わたくしに話し掛けられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？ 特にそこの中東人！」

まったく会話に興味を示さない刹那に、その女子生徒は指を指しながら言う。

刹那「…貴様の質問に答える義務が無い」

「なんですって!？」

一夏「大体俺は、君が誰だか知らないし」

一夏の放った言葉に、彼女は敏感に反応する。

セシリア「…わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして入試首席、模擬戦でも負け知らずのこのわたくしを!？」

刹那（模擬戦でも負け知らず…偶然か…？）

炭酸『模擬戦でも負け知らずのスペシャル様なんだよ!!』

刹那（…関係あるはずが無い）

一夏「あ、質問いいか？」

セシリア「ふん。下々の者の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏「代表候補生って、何？」

刹那ですらついていた肘が滑る程のボケ（無意識）に、聞き耳を立てていた数名のクラスメイトもずっこける。

セシリア「あ、あ、あ…」

一夏「『あ』？」

セシリア「あなたっ、本気でおっしゃってますのっ!？」

セシリアが凄い剣幕で一夏に詰め寄る。

一夏「おう、知らん」

そして、それにも物怖じせず堂々と無知をアピールしてみせる一夏に、刹那達クラスメイトの大半はため息をつく。

セシリア「…信じられない、信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビが無いのかしら…」

セシリアはと言うと、怒りが沸点を越えて逆に落ち着いたのか、こ

めかみを押さえながら独り言を呟っていた。

一夏「で、代表候補生って？」

セシリア「こっ「国家代表IS操縦者の候補生として選出されるエリート」の事だ。その程度は知っておくべきだぞ、一夏」：！」

一夏「なるほどなー：じゃあ、凄い奴なんだと」

刹那「そうだな」

説明に割り込んだ刹那を睨み付けていたセシリアだったが、一夏の言葉に目の輝きを取り戻す。

セシリア「そう！ エリートなのですわ！」

一夏を指す人差し指は、鼻に当たりそうなぐらいの距離だった。

セシリア「本来ならわたくしの様な選ばれた人間とは、クラスを同じくする事だけでも奇跡：幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

一夏「それはラッキーだな」

セシリア「：馬鹿にしていますの？」

セシリアの額に青筋が浮かぶ。

セシリア「そっちの中東人もそうですが：特にあなた。ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。ただ二人だけ男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど：結局、期待外れですわ」

一夏「俺に何かを期待されても困るんだが」

セシリア「ふん、まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しく接してあげますわよ」

一夏は呆れ顔で、刹那に至っては既に窓の外を見ている。

セシリア「ISの事で分からない事があれば、まあ：泣いて頼まれたら、教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

さぞ自慢気に話すセシリアだったが、その言葉に一夏と刹那は自然に反応する。

一夏「入試ってあれか？ ISを動かして戦うやつ？」

セシリア「それ以外に入試などありませんわ」

一夏「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

刹那「…あれが入試だったというなら、俺もだ」

セシリア「は…？」

二人の何気無い発言に、セシリアは言葉を失うのだった。

第3話 #クラスメイトは二人を除き全員女子（後書き）

己を担ぎ、他者を貶める。一人の少女が悪気無く放った言葉は、二人を憤慨させるには十分な代物だった。

次回【お国自慢は料理の不味さ】
刹那、イギリスに興味を持つ。

第4話 #お国自慢は料理の不味さ（前書き）

二泊三日の沖縄旅行より帰還。

今後、できるだけ週1以内に更新していこうと思います。

第4話 #お国自慢は料理の不味さ

教官がどうのこうのと話をする一夏と刹那に、セシリアは驚きに目を見開いていた。

セシリア「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

刹那「女子生徒では、という事だろう」

一夏「上に同じ」

刹那の言葉に、セシリアの中で何かにヒビが入る。

セシリア「つ、つまり…わたくしだけではないと…？」

一夏「いや、知らないけど」

セシリア「あなた達！ あなた達も教官を倒したと言うの！？」

刹那「ああ」

一夏「うん、まあ。多分」

セシリア「多分!？　多分ってどういう意味かしら!？」

一夏「えーと、とりあえず落ち着け。な？」

セシリア「こ、これが落ち着いていられ——」

そこで割って入ったのは、三時間目開始のチャイム。セシリアは俯きながら、わなわなと肩を震わせていた。

セシリア「っ…また後で来ますわ！　逃げない事ね！　よくつて!？」

一夏は嫌々そうに頷き、刹那は冷めた視線だけを送った。

千冬「それではこの時間は、実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一・二時間目とは違い、教壇には千冬が立っていた。

千冬「ああ…その前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

思い出した様に千冬が言う。

千冬「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでは無く、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、言えばクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更は無いからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。知識が皆無な一夏は疲れた様な表情を浮かべ、刹那は相変わらず外を眺めている。

「はいっ！
織斑君を推薦します！」

「私はセイエイ君を推薦しますっ！」

その声を皮切りに、女子生徒達から二人の名が大量に上がる。

千冬「では、候補者は織斑一夏と刹那・F・セイエイ……他にはないかい？
自薦他薦は問わんど」

一夏「お、俺！？」

刹那「何故俺がッ！？」

千冬「織斑、セイエイ。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？
いないならこの二人のどちらかだぞ」

一夏「ちよっ、ちよっと待った！　俺はそんなのやらな——」
自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権など無い。選ばれた以上は覚悟をしろ」

一夏「い、いやでも——」

食い下がろうとする一夏の声を、突然甲高い声が遮る。

セシリア「待ってください！　納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのは、額に青筋を走らせたセシリア。カールがかった金髪が揺れ、透き通った碧眼は怒りに燃えている。

セシリア「その様な選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに：このセシリア・オルコットにその様な屈辱を、一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

相当憤っているのか、普段の華やかさはどこかへ行ってしまったている。

セシリア「実力から行けば、わたくしがクラス代表になるのは必然の事。それを、物珍しいからといった理由で極東の猿や中東の貧乏

人にされては困ります！　わたくしはこの様な島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

見れば一夏は眉を潜め、刹那も視線をセシリアに向けている。

セシリア「いいですか！？　クラス代表は、実力トップになるべき！　そしてそれはわたくしですわ！」

周囲の視線も気にせず、怒濤の剣幕でセシリアは続ける。

セシリア「大体！　文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない事自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

そこまで来てやっと、一夏がおもむろに立ち上がった。

一夏「イギリスだって大してお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

言い切ってしまったからやっと、自分の発言に驚く。

セシリア「なッ…!？」

刹那「やめておけ、一夏」

そして、追い討ちと言わんばかりに刹那が立つ。

刹那「その手の人間は言うだけ無駄だ。家系の…いや、国の教訓が性格に出ているんだろう」

教壇に立っていた千冬は、刹那の行動に笑顔を浮かべていた。

千冬（ふっ…言う時は言うじゃないか）

セシリア「あっ、あっ、あなた達！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

刹那「先に言ったのは貴様だ」

セシリア「っ…！」

刹那の鋭い視線に威圧されるセシリア。しかし、彼女には誇り高いプライドがある。

セシリア「決闘ですわ！」

一夏「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

刹那「上に同じだ」

セシリア「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

一夏「侮るなよ。真剣勝負で手を抜く程腐っちゃいない」

セシリア「そう？ 何にせよ丁度いいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたと無い機会ですわね！」

既に勝ったかのような態度を見せるセシリアに対し、一夏も悠々としている。

一夏「ハンデはどのくらい付ける？」

セシリア「あら、早速お願いかしら？」

一夏「いや、俺がどのくらいハンデ付けたらいいのかなーと」

一夏がそこまで言って、周囲から爆笑が巻き起こる。

「お、織斑君。それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑君は確かにISを使えるかもしれないけれど、それは言い過ぎよ」

そう。

この世界は『女尊男卑』。腕力は最早何の役にも立たず、過去の兵器はISに一切対抗出来ない。それ程の超兵器を、女子は潜在的に使用できるのだ。

一夏「：なら、ハンデはいい」

セシリア「ええ、そうでしょうそうですね。寧ろわたくしが、ハンを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ：男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

先程までの激昂は消え、明らかな嘲笑を浮かべていた。

「ねー、二人とも。今からでも遅くないよ？　セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

女子の気さくな声にも、一夏は耳を貸さない。刹那に至っては聞いてすらない。

一夏「男が一度言い出した事を覆せるか。ハンデは無くていい」

「えー？ それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも知らないの？」

一夏「…」

刹那「違う」

黙り込んでしまった一夏の代わりに、刹那が声を上げる。

刹那「常識は覆った。ISは女子の特権では無い。だからこそ…俺と一夏がいる」

刹那の言葉に、クラスは静まり返った。

千冬「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑・セイエイ・オルコットの三人はそれぞれ用意をしておく様に。それでは授業を始める」

最後は千冬が締め、本来の授業が始まる。

刹那は窓の外…青空に視線を移した。

第4話 #お国自慢は料理の不味さ（後書き）

他者より前へ、他者より上へ。己のプライドから来るそれは、どうしようも無く自分を歪ませてしまう。だからこそ、それを断ち切る者がいる。

次回【天使】

刹那、ガンダムになる。

第5話 #天使（前書き）

更新。

最近は友人の小説にもはまりつつあります…

第5話 #天使

刹那「…」

無言で廊下を歩く刹那。その表情はいつもと違い、どこか引き締まった様な雰囲気だった。

刹那（後悔はしていない…奴の歪みは、俺が…!）

? 「うわっ」

刹那「ぐっ」

考え込んだまま歩いていた時、不意に誰かとぶつかる。双方とも倒れはせず、少しよろける程度だった。

刹那「お前は…篠ノ之箒?」

箒「…刹那・F・セイエイか」

刹那「略してくれて構わない」

箒「だったら：刹那だな。私の事も箒で構わない」

刹那「了解した、篠ノ之箒」

箒「話を聞かないんだな」

千冬に次ぐ大和撫子の箒。身長は僅かに刹那より大きかった。

箒「ボーツとしていた様だが：大丈夫か？」

刹那「ああ。お前も：」

箒「？」

刹那「一夏の事で苦労しているだろう？」

箒「なッ——いち：おっ、織斑とは、何の関係も無い！」

刹那（そこまでは言っていないが：）

箒「まっ、まあとにかく！　これからよろしく頼む！」

刹那「あ、ああ」

箒「で、ではなっ！」

確信犯としか思えない様な反応を残して、箒は早足で去った。

刹那「…」

刹那「…これが、学生というものか…」

今になって、沙慈の気持ちを少しだけ理解した刹那だった。

・ ・ ・ ・ ・

？「体調はどうか？ 見た目頑丈そうだけどさっ」

？「問題無い。貴女のお陰だ、プロフェッサー」

束「もー、私の名前は篠ノ之束だよっ」

自ら篠ノ之束と名乗った女性は、ベッドに横たわっている金髪の青年に笑顔を見せる。

束「それにしても興味深いね。男性でありながらISを動かせるっていう人間が、非公式とはいえ二人も増えたなんて」

？「私とて分からない事ばかりさ…だが、やらなければならない事があるのは確かだ」

東「ふーん…ま、ハムハムらしいけど？」

？「…その呼び方は断固辞退させてもらう」

東「あははー♪ ごめんごめん、グラハム・エーカー上級大尉殿
♪」

最後ににんまりと笑って、東は部屋を出ていった。

グラハム「偶然…いや、これは必然か」

小さく笑顔を見せ、その手に握っていた物を見つめる。

グラハム「やはり私と君は、運命の赤い糸で結ばれている様だな…
少年」

窓の外を見ながら、小さく呟くグラハムだった。

・
・
・
・
・
・
一夏「…」

刹那「…はあ」

一夏「お互い、疲れるな…」

食堂の一角。その半径5mには女子生徒が群がっている。席に座っているのは、もちろん刹那と一夏である。

刹那「ソレスタルビーイングでさえ、食事の時間は気を楽に出来たんだがな…」

一夏「ソレスタ…何？」

刹那「いや、こっちの話だ。気にするな」

うっかり口に出してしまったが、何とか誤魔化せた事に安堵する刹那。

一夏「そういや、刹那は準備とかしてるのか？」

刹那「準備？」

一夏「セシリア…なんたらさんと戦う準備さ。ちなみに俺は、箒についてもらって特訓してるぜ」

刹那「なるほどな」

一夏「聞いた話、相当強いみたいだしな。かと言って、もちろん負けたくないしょ」

刹那「ああ」

ホットドッグを頬張る刹那。

一夏「何なら、刹那も一緒に特訓してみないか？」

刹那「そうだな…時間があれば、覗かせてもらう」

一夏「おう！」

一夏の純粋な笑顔に、刹那もつられて笑うのだった。

・ ・ ・ ・ ・

一週間後。約束通り、アリーナにはそうそうたるメンバーが集まっていた。

一夏「最初は刹那か」

箒「そんな感じで大丈夫か？」

刹那「大丈夫だ、問題無い」

一夏（いい奴だったよ…って、俺は何を言ってるんだ？）

無意識にボケた刹那に、一夏は突っ込む事が出来なかった。

千冬『準備は出来たか？ セイエイ』

刹那「ああ…いつでも行ける」

千冬『そうか。だったらさっさと始めるぞ』

刹那「了解。ISを起動する」

刹那「…来い、ガンダアアアムッ!!」

一夏「は？」

刹那「…エクシア、起動確認」

箒（今の前フリはなんだったんだ…）

エクシアを起動・装着した刹那。膝を軽く曲げ、腰を落とす。ISの射出姿勢である。

一夏「刹那!」

刹那「…?」

一夏「…負けんなよ!」

刹那「…ああ、分かっている!」

一夏の激励の言葉は、刹那の背中を強く押した。

刹那「エクシア、刹那・F・セイエイ…出るッ!!」

エクシアのバーニアを吹かし、アリーナへ飛び立つ。
そこには既に、専用ISを身に纏ったセシリアがいた。

セシリア「逃げずによく来ましたわね」

刹那「…」

セシリア「最後にチャンスを上げますわ」

刹那「何?」

遠距離射撃型の第三世代IS〈ブルー・ティアーズ〉。

セシリアは優雅に、見下す様にして刹那に言う。

セシリア「泣いて謝ると言うのなら、許してあげない事もなくつてよ？」

しかしその言葉に、刹那は耳を貸すつもりは無い。

刹那「悪いが、断る！」

セシリア「そう？ だったら……」

次の瞬間、セシリアは持っていたライフルヘスターライトMkⅠ？
✓を構える。

標的は、刹那。

セシリア「——お別れですわねッ！！」

放たれたレーザーは一瞬で着弾。アリーナ内に煙が巻き上がる。

一夏「刹那ッ！」

箒「やられたか……！？」

真耶「セイエイ君が！」

各々が不安な表情を浮かべる中、千冬だけは余裕気だった。

千冬「フツ…機体に救われたな、あいつめ」

真耶「え…？」

煙が晴れていく。

勝ち誇った笑みを浮かべていたセシリアは、一瞬で言葉を失う。

刹那「…全身装甲展開終了。機体各部に損傷無し」

セシリア「そんな…!？」

そこにいたのは、全身を装甲に包んだ『天使』。

刹那「エクシア、目標を駆逐するッ!!」

ガンダムとなった刹那が、動き出した瞬間だった。

第5話 #天使（後書き）

『この世界に神はいない』。少年のその考えを打ち破ったのは、ガンダムと呼ばれる存在だった。

次回【エクシア】
歪みを断ち切る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4063t/>

刹那 in IS世界

2011年5月30日21時31分発行